



政治家と中小企業経営者が

本気で交わり、日本再生を

かんたけいくお  
**寒竹郁夫**

●プロフィール

政経倶楽部代表幹事、デンタルサポート株式会社代表取締役社長、歯科医師、歯学博士。一九五七年東京鶴生まれ。日本大学大学院にて歯学博士学位を取得。大学での勤務を経て、千葉市美浜区に寒竹歯科医院を開業。一九九一年、「医療法人社団郁米会（広域医療法人）」を設立。そしてその後、デンタルサポート(株)を設立し、本格的な組織での訪問歯科診療サポート事業の全面展開を行う。二〇〇八年には、歯科企業として初の介護事業に参入し、「歯科・医科・介護をつなぐワンストップサービス」を提供するゲートウェイ（架け橋）企業として展開している。

企業理念は「医療の倫理と企業の論理の融合」。グループ年商六〇億円、従業員数六百人。好きな人物・織田信長・吉田松陰・松下幸之助。趣味は読書（歴史・登山・マウンテンバイク）。

## 政治家と中小企業経営者が本気で交わり日本再生を

「日本がおかしい」ということに皆、気がついてほしい

まず、はじめに言いたいことは、今の日本がおかしい、ということに、皆、気がついてほしいということです。「日本は本来すばらしい国なのに、おかしい現象ばかりが起きているのはなぜなのか」。このことに思いをよせてもらいたいです。目をそらさず、「ど真剣」に考えてほしいのです。

日本が本来すばらしいと言える所以、それはたくさんあります。

外貨準備高が世界第二位のキャッシュリッチ（外貨が豊富で、高い経済力・購買力を持っていること）な国であること。

なんといつてもまだまだ治安が良い平和な国であること。人間性が勤勉であること。企業に技術力があること（私の仕事の歯科医療分野でいえば、歯科技工の技術は世界一のレベル）です。

そして、自然にもめぐまれ四季折々の美しさ、美味しい料理は世界一です。教育レベルも高い、医療技術も高いなど、すばらしさをあげたらまだまだたくさんあるはずです。そんな恵まれた国でありながら、なぜ、起きていることは最悪のことばかりなのでしょう。

国の累積財政赤字は一千兆円とも言われています。対外的にはキャッシュリッチなのになぜ財政が赤字なのか。なぜ毎年、自殺者が三万人を超えているのか。世界的に教育レベルも高いはずなのに、なぜ青少年が考えられないような事件を次々に引き起こすのか。秋葉原事件に象徴されるような無差別殺人などが頻発するのはどうしてなのか。

企業の不祥事や、官僚の責任のなさも次々と露呈し、政治も混迷しています。

なぜ日本でこのような現象が起こっているのか。このことに、皆、真剣に思いをめぐらせてくれ、と言いたいのです。

世界標準で見てもおかしいと思いませんか？日本よりも条件的には悪い国がたくさんあるのに、なぜ、日本だけがこんなに失望感が漂い、厭世観がはびこっているのでしょうか。

日本の政治は、これまで経済の発展を最優先させてきました。しかし、その経済を支えるべき国民の生活や希望と言った問題に、本来、国民の代表である政治家があまりにも無頓着であったと言えるのではないのでしょうか。

### 日本がおかしくなったのは、国家戦略の欠如による

日本がおかしくなった原因は、国家戦略の欠如にあると私は思います。

政治家や官僚たちの責任は大きいのです。

昨今、政治家たちは、実力のあるなしよりも、人気があるかないかのタレント性で選ばれている傾向があります。かたや、官僚は、幼い頃から偏差値トップのエリートです。東大法学部を一番二番で出たような偏差値最高峰の人たちが、高級官僚となるのです。人気投票トップの政治家たちと、偏差値トップの官僚たちが、連綿と築いてきた結果が、今の日本の惨憺たる結果であり、累積財政赤字一千兆円なのです。これは巖然たる事実です。

つまりこれは、彼らに国というものをいかにリードしていくかというセンスがないということ。国家経営のセンスがないということは、民主党だとか自民党だとかいうレベルではなくて、今までリーダーと言われた、政治家や官僚たち、あるいは、学者、評論家たちに、「なんでそんな人たちにやらせているの？」「もう選手交代してもらいたい」ということです。

戦前の日本の経常収支は大赤字で、どうにかこうにか外国に金を借りて、やってきたような国でした。明治以降、借金を抱えながら「坂の上の雲」を目指して、日

本は本当に良い国になったわけです。

良い国、の定義はいろいろありますが、私の考える良い国とは、まず経済的に繁栄している国家であること、です。それによって退廃したとか、教育が崩壊したとかいう議論はありますが、それは別の問題です。やはり経済大国を目指すことは国家として必要なことであり、現実にGDP（国内総生産）世界第二位にまでなりました。

経済大国になり、技術大国になり、世界一安全な国と言われ、教育レベルも最高峰と言われるほどにまでなったのです。それなのに、今はもののみごとに、日本は良い国、と言えない状態になってしまっています。

それはなぜか？世界を牛耳るアメリカ覇権国家にやられてしまったためです。国のリーダーたる政治家や官僚たちに、国家戦略がなかったため、惨憺たる状態になってしまったのです。

※「坂の上の雲」―司馬遼太郎の長編時代小説。封建の世から目覚めた幼い明治国家がめざす欧米近代国家を「坂の上になびく一筋の雲」に例えた。

**戦略を考えているのは、中小企業の経営者だ  
そのセンス、野生の勘を国政に吹き込みたい**

では、今の日本で戦略を考えているのが誰か？それは中小企業の経営者です。はっきり言って、大企業の社長のほとんどはサラリーマンに過ぎず、サラリーマン社長に戦略はありません。

中小企業の経営者は、ジャングルの中に生息している動物のようなものです。明日食っていくためにはどうしたらいいか、という鋭い感性を持っています。黒ヒヨウのように野生の動物たちが持つ独特な勘を持って動いているのです。明日どうなるかわからない世界で、空気を読んで、流れを読んで、日々、敏感に感じて動いています。

どうやったら人は動くか、銀行とどうやってつきあっていったらいいのか。命がけで動いて、毎日を切り開き戦う、その様は戦国武将のようでもあります。

対して、多くの大企業のトップや、政治家、官僚たちには、そういう感性がありません。それが結果に出ている。だから、「総取替えしなくてはいけない」というこ

とです。

厳しい不況の中、中小企業の経営者たちは、戦略という部分において、独特の勘を持って、本能的に生き残ってきているのです。そういうパワー、戦略性や野生の勘というのを、政治の場、国政に吹き込んでいきたいのです。

例えば、明治維新の時には、地方で藩を経営していた役人たちが、自分の目で見ただ世界観を持って、古い体質の幕府を倒し、新しい政権を打ち建てたわけです。それと同じことをしようとは言いませんが、今の世の中、根本的な変革が必要だと思ふのです。

しかし、現実には我々中小企業の経営者が政策を作りたくても作れません。立法できないからです。だからこそ、政治家と中小企業の経営者が手を携えて、互いに交わり、補完しながら一緒にやっていく事が必要なのです。

互いの垣根をとっばらい本音で交わり、ぶつかりあっていかななくてはならないのではないのでしょうか。

### リーダーたちは歴史を勉強し、戦略を身につけよ

そもそも政治家や官僚は、歴史を勉強しているのか？

自分の出世や、地元の票集めに奔走していて、本質的な歴史というものを勉強していないのではないかと、私は言いたい。少なくとも我々経営者は、日々勉強しています。なぜなら歴史を勉強しないと、経営者は生き残っていけないからです。

「人の心に響く言葉を言えるようになるためには歴史小説百冊を読め」という教えもあるほどです。ジャングルで生き残っていく勘を養うためには、歴史を勉強するに尽きます。経営者はそれを本能的にわかっています。ですから、政経倶楽部では、毎月の例会の中で、時に応じて、歴史の専門家を招いて講演を聞いています。

しかし、多くの政治家や官僚は歴史を勉強していません。あるとき、政経倶楽部に来てくれた議員に「過去の戦史戦略を検証しているのですか？」と会員が質問したことがあります。それに対して、議員は「ノー」と明確に答えていました。恥ず

かし気もなく、ノーと明確に言えるほど、歴史を軽視しているということです。

日本には、歴史を学び、戦略を持ったリーダーが必要です。戦略とは、歴史そのものだ、ということは古今東西、あらゆる本に書いていることです。「これが戦略だ」というのは個人の感性によって違いますが、リーダーたる者は、その都度その都度、最も適した戦略を歴史に学び、考えることが大切です。

歴史というのは、厳然たる事実であって変わらなければいけません、戦略というものも、戦権交代をはじめ無数にあります。戦権交代をする、というのも戦略の一つに過ぎません。戦権交代がすべてではないのです。戦権交代をした後に戦略がなかったら同じことです。

日本がダメになったのは、戦略がなかったから。戦略がないというのは歴史を学んでいないから。歴史を学ばなくなったから、日本はダメになったのです。

### リーダーたちに欠けている「現場感」

歴史の勉強とともに、国のリーダーは現場感を持って感性を磨くことも大切です。

野生動物の感性をリーダーたちには身につけてほしいのです。

中小企業の経営者は、それを否でも応でも身につけざるを得なく、やっているのです。グローバル化の中、M&Aというものが入ってくれば、それに対抗しているか考える。企業の買収もやります。皆、世界標準に合わせて、学んでいる。良い悪いでなく、そうしなければ生きていけないからです。合併したり、買収したり、対抗したり、こちらから攻めたり。それがグローバル化の中の必然です。

そして志の高い経営者は、日本のためになるという理念のもとに動いています。

政治家にも官僚にも言えることは、現場感がないということです。それなりに現場の話を知っているのだからうけれども、現場感がありません。ですから、彼らは自分たちだけで固まってしまうがちです。松下政経塾出身者は出身者同士で固まっているように私には見えます。あえて、厳しいことを言わせてもらえば、野田佳彦衆議院議員と若手議員のグループである「花斉会」も、自分たちの仲良しクラブに見えてしまうのです。

松下政経塾出身者は、純粹培養された、高い理念の持ち主たちの集団です。彼らはクリーンです。一昔前の政治家のような悪いことはしません。しかし世間知らずです。

世間知らずの集まりが、国家戦略を構築できるかといえば、申し訳ないが一〇〇%無理です。政権運営は百年かかってもできないでしょう。それは現場感が欠如しているからです。

ボスザルになったことがない——従業員を死にも狂いで食わせた経験がない——いわゆる本当のトップになつたことがない人間には、本質的な組織が作れません。戦闘行為は得意だけれども、戦争はできないのです。選挙戦などは戦闘行為にすぎません。\*コンバットの、サンダース軍曹やヘンリー少尉にはなれるけれども、第二次世界大戦を勝利に導いたチャーチル英国首相や、数多くの戦果をあげた米国のニミッツ提督のような存在にはなれないということです。

今の政権に求められているものは、選挙戦や政党内の派閥争いなど、戦闘行為に

長けた政治家ではなく、チャーチルのように鳥瞰的な世界観を持った政治家です。

※コンバットⅡ一九六〇年代のアメリカのテレビドラマ。ノルマンディー上陸作戦以降のヨーロッパ戦線を舞台に、アメリカ陸軍歩兵連隊の視点から戦場での人間の様々な心理を描いた作品。日本でも人気を博した。

**現場感の欠如を補うために「政経倶楽部」がある**

だからこそ、その純粹培養の政治家たちと、我々のようなトップ経験のある人間たちが手を組まなければならないのです。現場感を持った人間が必要なのです。

繰り返しになりますが、現在の政治家は、一昔前の政治家のような悪いことではありません。しかし、そういう人たちだけでは百年かかっても国家戦略も政権運営もできません。なぜなら、戦闘集団を率いたトップの経験がないからです。

会社ひとつ経営した経験のない者に国家経営ができますか？

日本人はそもそも戦略を考えるのが苦手です。なぜなら、日本人のルーツは狩猟民族ではなく農耕民族だからです。しかし、農耕民族の平和性がなければ、世界平和は築けません。領地を奪って有色人種を利用してやろう、という狩猟的考え方はダメです。

理念的には、農耕民族のものがなければいけないのですが、こと国家戦略という部分においては、権謀術数が見えるような、清濁併せ持つことが必要です。農耕的な部分と狩猟的な部分を併せ持つようなところがないと、世界を相手に、日本という国家を運営できません。

中小企業の経営者、特にベンチャー企業の経営者たちには、その狩猟民族的な部分があります。

政治家と中小企業の経営者は、交わらなければいけない必要性がここにもあります。例えばアメリカでは、財務長官はゴールドマンサックスの元会長が就任しています。民間企業のトップがほとんど政治の中枢部に入ってきているわけです。

はつきり言って、日本では、政治家と経営者は互いを下に見ている節があります。

ある政治家は「松下政経塾にあらずんば政治家にあらず、政治家にあらずんば人にあらず」という匂いをプンプンさせています。一方、中小企業の経営者は、政治家を「こいつら世間知らずだ」「本質的に組織を作ったことがない人間だ」「人の動かし方がわからないな」などと思っているのです。会社を動かしている人間から見ると、政治家に大組織を動かすことは無理だと思えるのです。

しかし、どっちが上でどっちが下でもなく、互いが本音であい交わることが大切です。それによって、一つの理想的な仕組み、システムができるはずです。それが、政経倶楽部の目指すところなのです。

### チャンスは今。政権交代をして脱アメリカの日本を作れ

今、アメリカが急速に国力を落としつつあります。このチャンスに、早く国家戦略を構築し、それを実行できる国にしておかないとなりません。

私は仕事柄、アメリカの力が落ちてきていることを実感しています。今までアメリカのファンダが買い取る予定だった案件があぶれてきているのです。医療介護の分野



で言えば、なんでこんなに良い案件が、というような話が我が社にくるほどです。日本は環境問題や食糧問題など、諸問題を解決し、世界の一等国になれる力をまだ持っています。世界の本当の平和をリードできる国になり得るのです。

潜在能力も技術力もあるし、日本人が本来持つ、実直な精神やまじめな心も持っています。そのことを多くの日本人に気づいてほしいのです。

将来が安定すれば、若者は子どもを作ることができ、少子化問題も解決に向かい得るのです。

そのためには、具体的にまず政権交代をして、アメリカから距離を置くことが大切です。

政経倶楽部でご講演いただいた森田実さんの近著に、次のような一節があり、大変共感いたしました。少し長くなりますが、引用させていただきます。

「政権交代は、日本の再生のための最も大切な基本戦略である。今、日本を歪ゆがめ、日本国民に苦難をもたらしているのは、ブッシュ政権に従属している自民党と公明党の連立内閣であり、中央集権的官僚制であり、欲深い日本経団連と経済同友会であり、政治権力の手先と化したマスコミである。この政・官・財・マスコミの四者が癒着し、長期政権を維持してきたことから、数々の腐敗と頹廢たいはいが発生している。この醜悪な政治腐敗を解決する道は、総選挙による政権交代しかない」（『脱アメリカで日本は必ず甦よみがえる〜アメリカの終焉と日本経済再生への道〜』日本文芸社・平成二十年二月刊）

森田さんのおっしゃるとおりだと私は思います。ここ二〜三年の戦略は「脱アメリカ」です。少なくともそういう動きを世界にアピールすべきです。

そのためには、世界の動きが読める戦略的リーダーが現れなくてはなりません。戦略的な考え方ができるリーダーたちを何人作れるか、そこに日本の将来がかかっています。

今の日本を救えるのは、脱アメリカと、EU、ロシア、中国と等距離外交、そし

て東南アジアの盟主になること以外には考えられません。石油も食糧も労働力もあるのだから。そんなことは素人の私でも分かる。なぜ政治家は、この根本をもっとアピールしないのか。

政経倶楽部では、人間学経営研究所所長である林英臣先生を顧問に迎え、林先生の主宰されている「政治家天命講座」の関東支部を支援しています。この「政治家天命講座」では、本物の政治家育成のため、国是を担う志士政治家を育成しています。林先生は、松下政経塾第一期生で、野田佳彦衆議院議員と同期です。中国医学、武道、ヨガを修め、長年にわたり日本思想、東洋思想、仏教思想を研究され、松下幸之助氏からは経営思想を学ばれました。

これからの時代に求められる政治家は、深い思想や哲学に基づいて、経営力に長けた志ある人物です。林先生は、真の政治家育成に力を注いでいらっしやいます。政経倶楽部は、林先生と一緒に、日本の将来を自分のことのように考えられる人、世界における日本を鳥瞰的に見られる人、そんな志のある真の政治家を育てていきたいと思っています。

### 志の高い人間集団、政経倶楽部

冒頭にも示したとおり、今の日本はおかしいのです。それを憂いている人は大勢いることでしょう。日本をなんとかしなくてはいけない、と思っている人も大勢います。でも、その思いを実際に行動に移している人はどれだけいるでしょうか。思っているだけで実行していない人は、志を持っているとは言えません。

政経倶楽部を、実践の場として活用してほしいのです。

しかし、自分たちの主張ばかりだけではダメで、大同団結が大切です。小さいところは違っても、志という根っここの部分が同じであるなら、多少戦略が違っても、戦術的に違っても、立場が違っても、政治家だろうが、経営者だろうが、評論家だろうが、学者だろうが、一緒にやっつけていきます。

私は、新しい同志とともに、政経倶楽部を飛躍させたいと思っています。

野田佳彦衆議院議員とは、千葉県立船橋高校の同期です。高校時代の野田は柔道部、私は硬式野球部に所属する体育会系の人間でした。再会したのは、一九八七年、お互いが三十歳になる年です。野田は県議会選挙に出馬して当選し、私は歯科医師として開業という、人生これから、という時期でした。互いに意気投合し、以来二十年にわたり彼の政治活動を応援しており、平成十一年からは後援会長も務めています。

野田は県議会議員から国政へ進み、私も一歯科医師から訪問歯科診療サポートを主力事業とする株式会社を起こしました。その後、野田は落選を経験し、私も企業経営の中で紆余曲折があり、健康を害したこともありました。しかし、野田は再選し、やがて民主党の国対委員長、広報委員長にまでなり、私のほうは、企業も健康も持ち直し、現在は好調です。

そんな中で政経倶楽部が生まれたのは、同窓の船橋高校の後輩である坂間明彦からの相談がきっかけでした。彼の仕事は、ファイナンシャルプランナーです。坂間は仕事柄、日々多くの顧客の生の声を聞いています。そして、「中小企業の経営者た

ちの中には、今の政治に物申したい人間がたくさんいる。しかし、国政を担当する議員に直接、話をする機会はなかなかない。私利私欲ではなく、意見交換ができる仕組みを作れないか」と相談されたのでした。

坂間からそれを聞いた私はすぐに賛同しました。志のある同志が増えて、心ある政治家たちと意見交換できる場を作れば、政策提言の一つの場に成り得るだろうと思っただけです。まず野田を中心に、その試みをスタートさせようと、政経倶楽部第一回例会を、平成十六年六月に開きました。

会の名前は、尊敬する松下幸之助氏の「松下政経塾」をふまえて「政経倶楽部」としました。

会員は、現在五十名ほどです。中小企業の経営者のほか、弁護士、税理士、社会保険労務士、医師、会社員など職業は様々です。その道のプロフェッショナルが中心となり、毎月一回の例会や懇親会、研修旅行を開催しています。設立当初は二カ月に一回の例会でしたが、今では毎月、朝の例会を行います、五年目に入っています。

### 自分のビジネスも好転する

五年も続いているということは、我々の最大の武器です。当初ここまで続くとは、野田もまわりの人間も思っていなかったかもしれませぬ。

今の会員のレベルは大変高いものです。実際、途中で辞めていった人も二十人、三十人います。自分の利益にならないとか、ビジネスに役立たないとか、自分の思うとおりにならないとか、そのような理由で辞めていく人たちもいました。

そういう人たちは、価値がわかっていない、スケールの小さい人たちだったと思います。

自分のビジネスより、次元の高いことを考えていなければダメなのです。私の仕事で言えば、医療改革をどうするか、ということ以上に、日本をどうするか、というワンランク上のことを考える、そのような価値観を持ってなければ、ビジネスがうまくいくはずがなく、これはすべての職種の経営者に通じることです。

社長が私利私欲を捨てて、社会のために貢献する姿は、社員の心を動かします。

百回理念を語るより、百回説教するよりも、世のため、社会のため一所懸命活動している姿を見せたほうが、どれだけ高い価値があるでしょう。

社員は感動し、この社長についていきたいと思うでしょう。

政経倶楽部に参加してもらうことをきっかけに、一人ひとりの会員がいろいろと羽ばたいてもらえればと思います。

現在の政経倶楽部の会員は、その崇高な理念の持ち主たちです。これは私の誇りです。馬鹿がつくほど、“ど真剣”に日本の将来を語り合い、行動する。スケールの大きい、志のある人間ばかりです。

そういう心の信頼関係でつながった人たちが集まれば、おのずと自分のビジネスにも反映されていくのが現実です。

### 政経倶楽部の今後

これまで例会では、政治家、評論家、歴史家、官僚、ジャーナリストなど毎回さまざまな業界のゲストに講演してもらい、質疑応答をし、研鑽してきました。

政治家は野田佳彦衆議院議員やそのグループを中心に例会で交流してきましたが、政経倶楽部は、決して特定の団体や個人を支援する組織ではありません。今後は、野田佳彦衆議院議員や花斉会のメンバーに限定せず、若手の地方議員の育成にも力を入れていきます。

中小企業の経営者と政治家が手を携えて、戦略的なリーダーを作り出して、それを支えていく、ということ です。

掲げる理念は「日本再生」であり、そのための戦略として、まずは政権交代をめざしています。

政権交代が実現し、自民党が政権の座から降りれば、まずは、金の流れが変わり、政官業の癒着も壊れるでしょう。

私は、野田が日本再生のリーダーになり得る男だと信じています。私は野田の後援会長にもなり、野田を応援し続けてきました。

野田は松下政経塾出身の良い意味での純粹培養な人間です。清廉潔白な男です。

嘘がつけないし、ごまかしもできない、筋がとおったまっすぐな人間です。野田の理念にはぶれがなく、それを明確に伝えるための弁も立ちます。

しかし、それ故に世間知らずなところもあります。平成十八年、国対委員長るときには、若手議員をかばう形で、偽メール事件で辞任に追い込まれてしまいました。野田と花斉会のメンバーには、政権を担いうる見識や、政策をさらに磨いていってほしいと思います。

それぞれが自己研鑽する場として、政経倶楽部の存在がますます大きなものとなっていくと信じています。